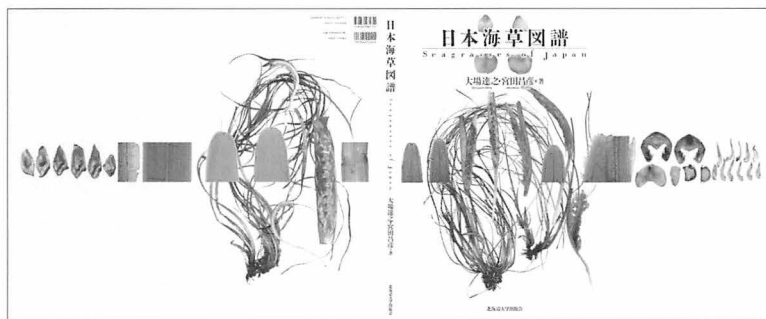


大場達之・宮田昌彦 著

書評・新刊紹介

日本海草図譜



北海道大学出版会、
A3判、総頁114
頁、2007年2月、
定価25,200円
(税込)、ISBN
978-4-8329-8175-1

千葉県立中央博物館分館「海の博物館」の菊地則雄氏から本書の発刊を知らされ、早速職場の蔵書として購入させていただいたが、その直後に宮田氏からの献本にも恵まれた。書籍はA4判が最大級なのだが、この本はその倍のA3判で、しかも重量は押し葉作成用の重石にも使えるほどの横綱級である。しかしサイズや重量は驚きの序章に過ぎない。まずブックケースと思っただけは輸送のための保護箱だったのだが、廃棄する気にはとてもなれない。本書には日本列島周辺海域に分布する海草および準海草30種が収録されているが、その全種類の外形と部分接写像のカラー図版が周辺にちりばめられた中央を1種類の大型映像が占めるという、芸術的な鑑賞眼にも耐えうるデザインによってこの保護箱は飾られているのである。箱から本体を引き出すと、カバーを飾る映像が目に入るが、その表側は保護箱中央と同じ種類、そして裏側はよく似ているが拡大された葉の縁辺に差異がある。本を開いてみて、表側がエビアマモで裏側がスガモとわかるのだが、両種は本邦沿岸を南と北に住み分けている主要種でありながら外形や生態からは識別不可能な難物同士なのである。しかしこのカバーを見れば両者の相違点が一瞬にしてわかるという仕掛けになっている。

カバーの全面を埋める見事なカラー図版を見ただけでも、本書をA3という特大判としたわけが納得できた気分になるが、これほど大きくしかも鮮明な図版で本書を構成できた理由は、著者らによって工夫された画像の記録法にあるということが、第1ページの「はじめに」を読んで理解することになる。

著者の大場達之氏は千葉県立中央博物館の副館長を1996年に定年で退かれた方であり、宮田昌彦氏は1988年から同博物館に務め現在は植物研究科科長の職にある。同博物館では「千葉県植物誌」(2003)が編纂されたが、その際に比較の必要上から日本産アマモ科全種類の生きた資料を収集し、大型スキャナによって写真を遙かにしのぐ精細な映像を記録することができたため、これが契機となって日本列島周辺海域の海草図譜を刊行するという構想が生まれたとのことである。

千葉県立中央博物館は、千葉県出身で我が国における植物生態学の教祖的存在でもある沼田真先生のご尽力で設立され、二代目館長には我が国の藻類学を隆盛に導いた千葉県出身の千原光雄先生が就かれたが、両先生とも私の大先輩であり、そし

て千原先生は私の学部生時代からご指導いただいた恩師でもある。幸いなことに、私は千葉県立中央博物館分館の基本設計等に関する検討委員として、同博物館を頻りに訪ねる機会に恵まれ、全国の県立博物館の中でもトップクラスと言える施設設備を眼の当たりにし、優秀な多くのスタッフに接することもできたのだが、この博物館にして初めてこのような素晴らしい本を生み出すことができたのではないかという気がする。

もちろん大場・宮田両氏の創意工夫や努力がなければ本書は生まれなかったのだが、大場氏は高山と海岸の植物群落の分類、宮田氏は紅藻の系統分類を主として研究してこられたため、私も両氏が本書を著作されたことに驚いた。しかも「日本海草図譜」という書名から受ける印象と実際に本書を手にしたときに受けた迫力とはあまりにもかけ離れていた。これまで海草の図版は海藻図鑑の末尾に添えられた代表的な数種について見る程度だったが、本書では淡水から汽水にかけて生育する「準海草」としてのイトクズモ属とカワツルモ属を加えて30種を収録している。そして1種ごとにカラーの見開き2ページを費やし、分布地点・生育状態・全植物体・葉や花等の拡大像・葉や根茎の断面顕微鏡像等が、従来の常識を遙かに超える鮮明さで印刷されている。

本書は第1章「日本産海草概説」、第2章「科・属・種の検索と記載」、第3章「栄養体による種の検索」、第4章「日本海草図譜」、第5章「海草の群落体系」、第6章「海草と人とのかかわり」、第7章「Seagrasses of Japan (第2章の英語版)」という構成である。圧巻はもちろんカラーページからなる第4章だが、代表的な海草群落における垂直分布等の高度な専門的情報に満ちた第5章のあとには、親しみやすい内容の第6章が続く。また驚くほどに鮮明な映像はどのようにして得られたのかという疑問を、読者は当然抱くことになるが、著者らがスキャノグラフィと呼ぶその手法についての詳細な説明と、その歴史的立場についての解説が第4章の冒頭に記されている。これまでテレビ放映などでは海草を「かいそう」と発音し、海藻と混同する愚を重ねてきたが、本書は第1章の冒頭で「海草(ウミクサ) Seagrass とは・・・」と記している。もはや頑迷なマスコミや国語審議会あたりも海草の読み方を変えざるを得ないだろう。

(南三陸町自然環境活用センター 横浜康継)